

「羅城をつくるー平城京と平安京ー」



平安京羅城門復元模型（京都駅前）

平安京羅城・九条大路の調査

プログラム

- 報告 「平安京羅城の発見」
李銀眞氏（公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所）
- 講演1 「平城京の羅城とその周辺」
佐藤亜聖氏（滋賀県立大学）
- 講演2 「平安京の造営計画と京南辺の造営過程」
網伸也氏（近畿大学）

日時

令和3年11月20日（土）

開始：14時（13時30分 受付開始） 終了予定：16時

会場

京都アスニー 4階ホール／京都市中京区丸太町通七本松西入

主催：公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

共催：公益財団法人京都市生涯学習振興財団

平安京羅城の発見

(公財)京都市埋蔵文化財研究所 イ ウンジン 李 銀眞

はじめに

I. 羅城とは？

羅郭・外郭ともいい、人々が集中して居住する空間を囲む城壁を指す。中国では外敵防御のため、堅固な羅城が築かれたが、外敵のない日本の都城では、都の威容を示す施設として京の南面にのみ造られていたと考えられている。

II. 平安京の羅城門跡

- 1) 推定位置と現状：九条旧千本通交差点北側に位置し、公園内に「羅城門遺址」の石碑。
- 2) 造営と廃絶：弘仁七年（816）八月に大風で壊れ、天元三年（980）七月に暴風雨で倒壊。以後は再建されずに荒廃。治安三年（1023）に藤原道長が法成寺造営に使うために羅城門の礎石を運搬させる。
- 3) 推定規模と諸説
『拾芥抄』宮城部一「二重閣七間」と記載
裏松固禪の『大内裏図考証』-九間七戸と復元
- 4) 発掘調査：4次にわたる発掘調査が実施されたが、江戸時代の鍋取川の氾濫堆積・護岸・護岸杭跡・石組溝などの検出にとどまり、平安時代羅城門に関連する遺構は確認されていない。

III. 『延喜式』からみる平安京の九条大路と羅城

- 1) 『延喜式』左右京職京程条
「南北一千七百五十三丈。(中略)南極大路十二丈。羅城外二丈、＜垣基半三尺、犬行七尺、溝広一丈＞路広十丈。」
- 2) 問題の所在
 - ①九条大路の道路幅は、10丈？12丈？⇒平安京の南北長と関わる問題
 - ②「羅城外二丈」の解釈。九条大路の道路幅は10丈で、これに羅城外2丈を加えて12丈か？
 - ③羅城の高さは、『延喜式』木工寮築垣から、1丈3尺（約3.9m）と推定され、京の南面だけ羅城が造られ、京の東西北辺は土塁が築造されたとする説が有力であった。しかし、発掘調査によって実態が確認されたことはなく、今回の発掘調査で初めて確認できた。

IV. 2018 ～ 2019 年度の発掘調査成果

1) 概要

2) 平安時代遺構

①九条大路南北両側溝

- ・北側溝：3区の南西部で古段階の溝412と新段階の溝170の2条を検出。拡張区⑥では、各々の溝の西延長部と考えられる溝535(古段階)と溝530(新段階)を検出。古段階の北側溝は、10世紀代の遺物を含む落ち込みの下層から検出。
- ・南側溝：拡張区①で溝360を検出。拡張区②で西延長部と考えられる溝529を検出。
⇒南北両側溝（溝412・360）の心々距離は30m、約10丈。

②九条大路路面（礫敷567）：九条大路南北両側溝の間で検出。残存長さは、約22m。径1～2cmの礫を固く敷き詰めている。

③犬行（礫敷414）：拡張区①の中央部、溝360と高まり365の間で検出。南北約1.5m。

④羅城基底部（高まり365）：拡張区①の中央で検出。残存高6～18cm、南北幅は3m（1丈）。砂礫からなる基盤層を掘り込み、細砂と砂礫混じりの土を盛り、突き固めて構築。検出位置や構築土の状況から羅城の基底部と考えられる。

3) 調査成果

①四至の京極大路を確定。

②九条大路の規模を確定。 ※__は、検出遺構

九条大路南北両側溝（溝412・360）の心々距離30m（10丈）＋羅城内側の犬行（幅1.5m・5尺）＋北築地の基底幅6尺の半分3尺＋北築地の犬行幅5尺＋北側溝の半分2尺＋南側溝の半分2尺＋羅城基底幅6尺の半分3尺⇒九条大路の道路幅は12丈。

造営当初、路面幅約9丈6尺（約28.8m）の『延喜式』の規定通りに施工されたことが判明。

③九条大路の施工範囲と時期

- ・北側溝：拡張区⑥の溝535（古段階）・530（新段階）
- ・南側溝：拡張区②の溝529

⇒西寺からさらに西靱負小路の西側、右京九条二坊五町の東一行までは施工。

- ・補修・再施工の痕跡はない。10世紀代の遺物を含む落ち込みの下層で検出

⇒平安時代前期から施工された後、10世紀以降は道路として機能していなかった。

④羅城基底部と築造範囲：羅城基底部の痕跡は、拡張区⑤の羅城推定ライン上に土質の異なる範囲が一定の幅をもって東西方向に認められ、右京域では羅城が西大宮大路の西側まで築造されていたことは確定できた。

⑤「羅城外二丈」の問題：羅城に伴う外側の犬行（2.1m：7尺）と溝（3m：1丈）に関しては、全く検出されていない。これまでの発掘調査によって確認されてきた条坊区画と『延喜式』京程条の整合性からすると、『延喜式』の記載通りに羅城の外溝を施工した可能性は非常に高い。ただ、その範囲は、平安京の正面を飾る羅城門の周囲、あるいは東寺・西寺の前面に限られていた可能性がある。

おわりに

【主要参考文献】

網伸也 2011『平安京造営と古代律令国家』塙書房

井上満郎 1978『研究史平安京』吉川弘文館

滝川政次郎 1967「羅城・羅城門を中心とした我が国都城制の研究」『法制史論叢』第二冊 角川書店

奈良文化財研究所 2003『東アジアの古代都城』研究論集XIV奈良文化財研究所学報第66冊

福山敏男・杉山信三・浪貝毅 1971「羅城門跡発掘調査報告」『京都市埋蔵文化財年次報告 1971』京都市文化観光局文化財保護課

村井康彦 1970「平安京の形成」『京都の歴史―平安の新京』学芸書林

村野正景 2013「1960年代の平安京羅城門跡発掘調査―遺構編―」『朱雀』第25集 京都府京都文化博物館

山中章 2011「日本古代都城の羅城をめぐる諸問題」『東アジア都城の比較研究』京都大学学術出版会

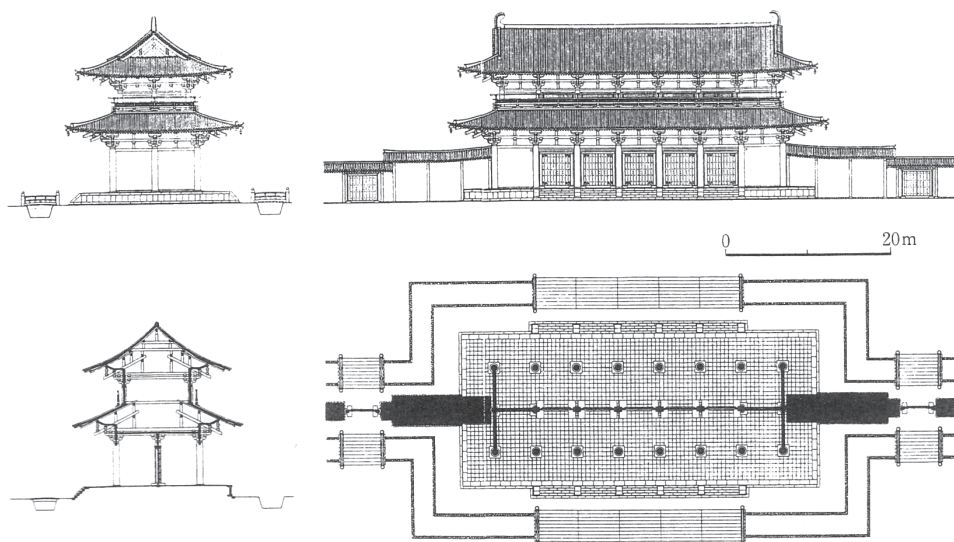


図3 平安京羅城門復原図（『平安京提要』1994）

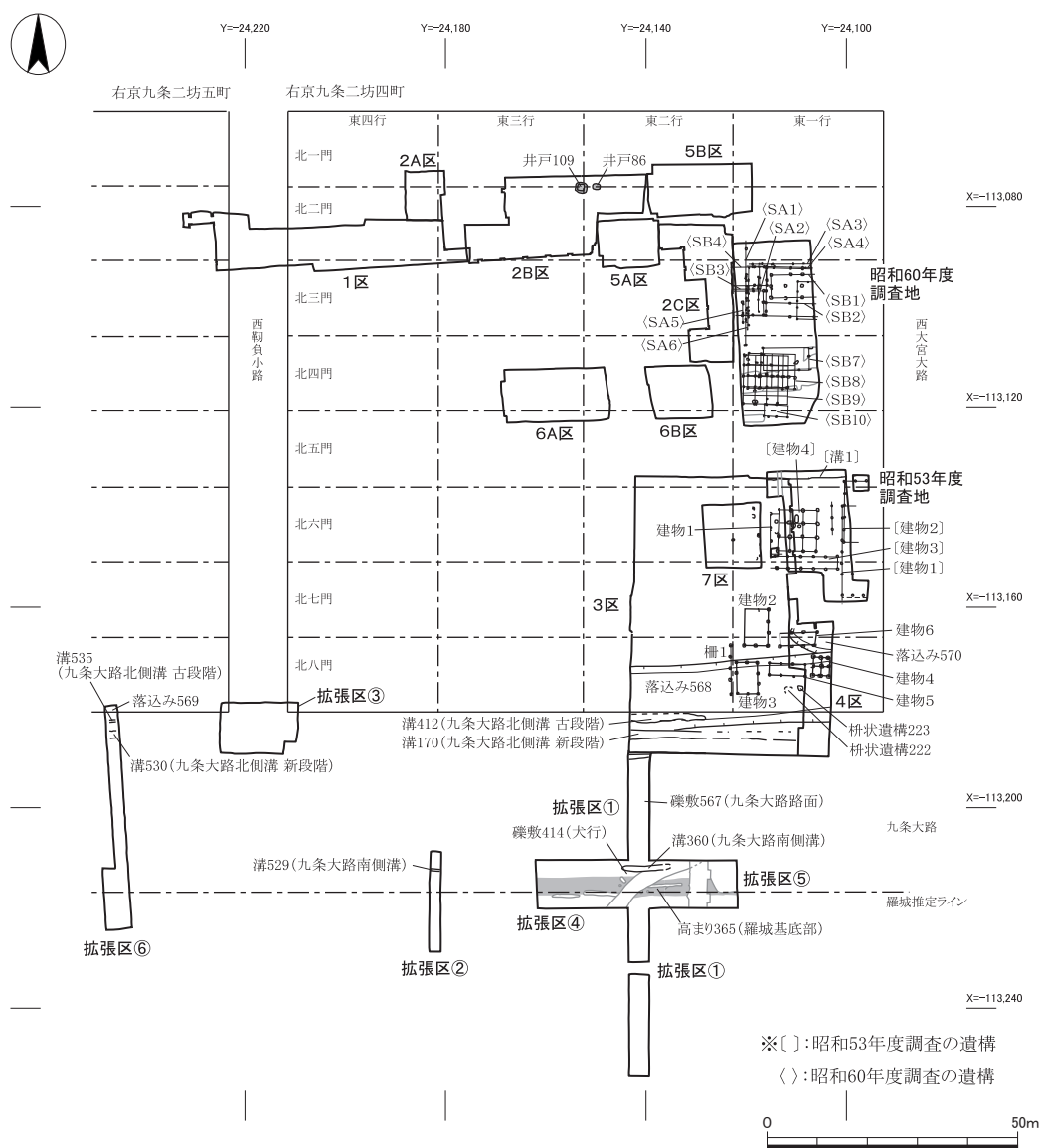


図4 平安時代前期から中期の遺構配置図（1：1,500）

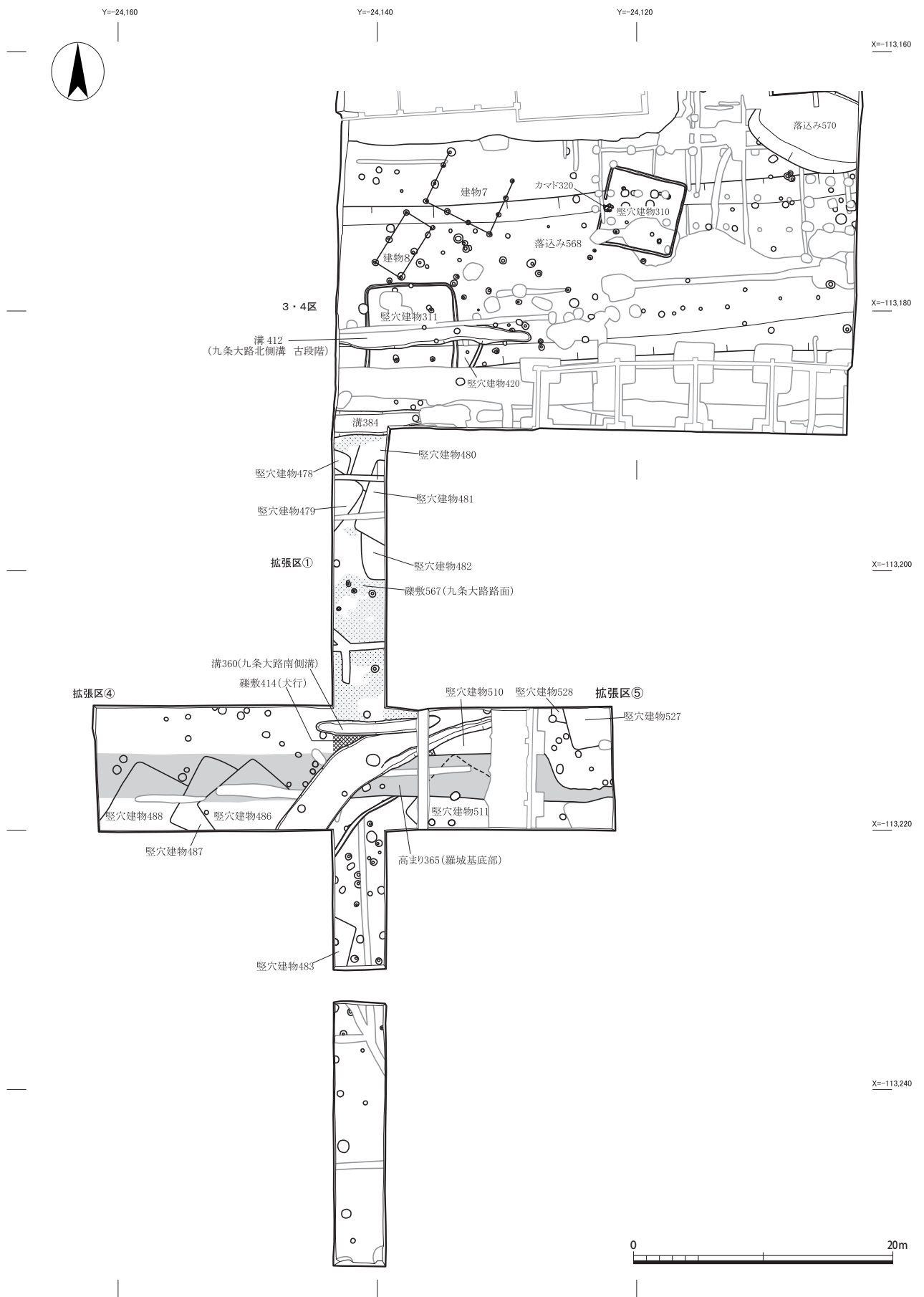
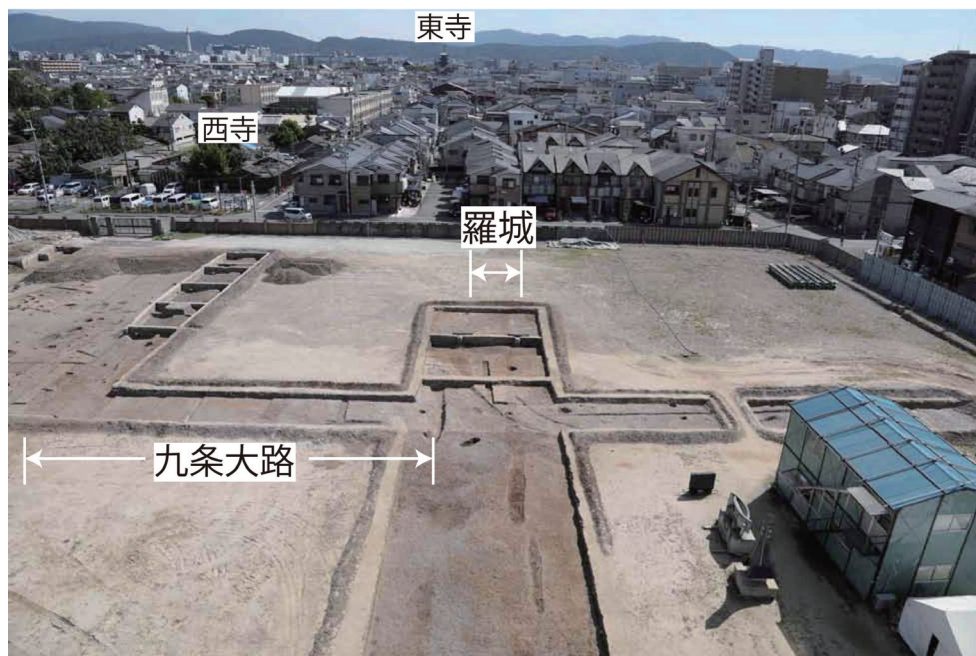


図5 3・4区、拡張区①④⑤の遺構平面図（1：400）



①拡張区①④⑤の全景（西から）



⑥九条大路北側溝（旧段階・東から）



⑤九条大路南側溝（東から）



②九条大路南側溝・犬走・羅城基底部（西から）



③九条大路路面（北東から）



④九条大路路面断割り断面（東から）

図 6 九条大路北側溝、路面、南側溝、羅城基底部の写真

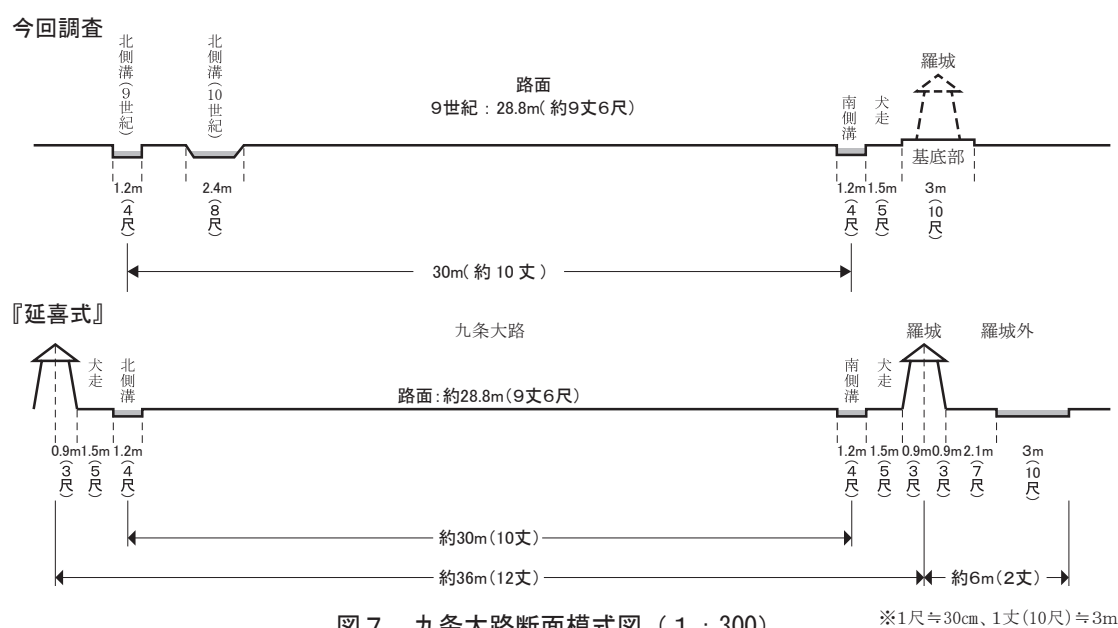


図 7 九条大路断面模式図（1：300）

平城京の羅城とその周辺

滋賀県立大学 佐藤亜聖

1. 2005・2007 年平城京南方遺跡（旧称下三橋遺跡）の調査

（1）十条条坊の検出

大和郡山市と（公財）元興寺文化財研究所の共同調査。羅城担当部分は大和郡山市。

（2）羅城遺構の概要

- ・柱間 東西 270cm、南北 150cm
- ・柱は抜き取りが行われるが、柱根に礎板を持つものあり。
- ・余剰帯 南北共に約 500cm
- ・内濠 幅約 330cm、深さ 50 ～ 60cm。ただし西端は 90cm まで深くなる。埋土はいずれも人為的埋土だが、上下層の間に間層があり、時期差の存在が考えられる。
- ・外濠 幅 400 ～ 600cm、深さ 60 ～ 90cm、埋土は内濠と同じ。ただし、最上層に 9 世紀後半以降の遺物含む。沈み込んでくぼ地となって当該期まで痕跡を残していたと考えられる。
- ・東一坊大路路面を閉鎖して羅城を設置するが、内濠・外濠はいずれも路面を破壊しない位置関係で止まる。東一坊大路以東には確実に続かない。羅城脇に歩行痕があり、羅城と東一坊大路東側溝の間は人が行き来できる空間。
- ・設置時に小溝を掘る。
- ・廃絶時に大量の小型壺と土師器皿を含む祭祀土坑が掘られる。

2. その後の調査

（1）橿原考古学研究所による調査

右京側における羅城遺構の検出。

（2）大和郡山市教育委員会による調査

・2011 年の調査（2005 年調査区から西に 100m）

6 基の羅城柱列確認。内濠が未検出。

羅城柱穴に明確な柱痕跡を確認。柱直径 12 ～ 16cm と指摘。

設置時にやはり小溝が掘られる。

・2015 年の調査

右京側で 6 基の羅城柱穴。幅 6m の基壇状削り出し。内濠と外濠確認。6644B 軒平瓦出土。外法面に瓦と木片含むブロック土→築地積み土の可能性を指摘。

・2018 年の調査 右京側における十条条間路の検出

・2019 年の調査 右京側における十条条間北小路の検出

3. 平城京羅城の特徴と課題

(1) 構造

- ・ 梁間 150cm の二列柱
- ・ 柱直径 12 ～ 15cm (2005 年調査時は抜き取り時のわずかな痕跡と堀方の大きさから 25cm 程度の柱を想定していた)
- ・ 2015 年調査によって外濠内肩にブロック土。この層に板状木片はじめ木材散乱。
→ 梁行が狭く、柱も細いため単廊としては成り立たない。瓦葺と考えられるが、柱の細さが構造推定を難しくしている。築地構造の可能性もあるが、柱が垂直に立ち上がることや、間隔・規模などが通常の築地と大きく異なる。また礎板を持つものもあるなど、確実に柱が重量を支える構造である。なによりもこれほどの規模の築地ならば積み土の痕跡が濠に残りそうだが、2015 年大和郡山市調査のわずかなブロック土しか痕跡がない。丁寧な解体が行われたものか。板塀構造もあり得るが、積極的根拠に乏しい。
※平安京羅城は積み土があるにもかかわらず柱列がない。。。
※十条坊廃絶後、南辺地域に大量の土取り穴。あるいは壁土の採掘か。

◎藤原宮大垣は小舞を用いた土壁構造と推定。この構造を応用して土壁構造の復原も可能。

(2) 設置時期

東一坊大路西側溝廃絶以降 (平城宮土器Ⅱ期 (716 - 734) 並行期以降)

出土瓦は全て一枚造

羅城門の記述について、『続日本紀』和同 7 年 (714) の新羅使の入京に際しては、騎兵 170 騎で「三橋」で迎える。『同』天平 19 年 (747) 羅城門で雨乞記録が羅城門の初出。

→ 8 世紀第 2 四半期が造営候補

(3) 廃絶時期

抜き取り痕および抜き取り後の祭祀土坑から長岡京期の土器出土。長岡遷都時に解体。

おわりに

平城京羅城から見た平安京羅城

正面一坊分から外れた場所。羅城門から一坊分と構造が異なるのか？

築地積み土があるのに副柱がない構造は平城京羅城と対照的。

羅城とは何かという本質的問いかけ

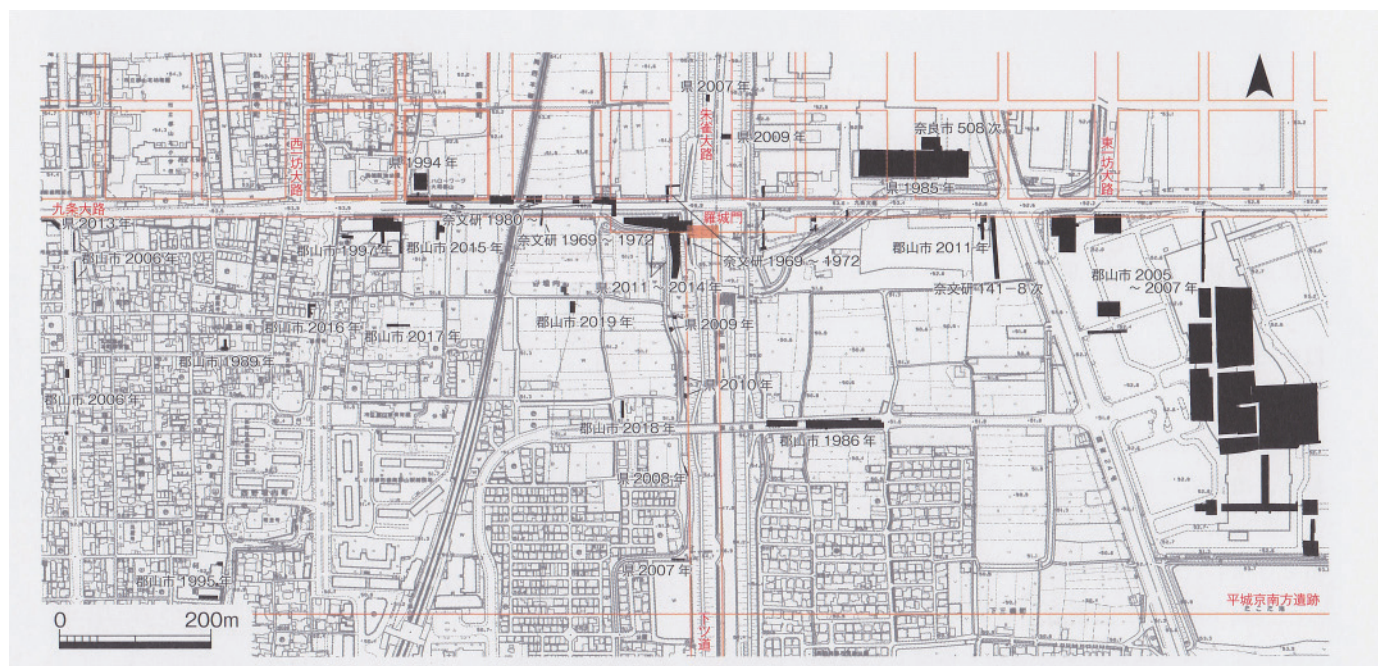


図1 平城京南辺の調査（大和郡山市教委 2021『平城京南方遺跡範囲確認調査概要』VIより一部改変）

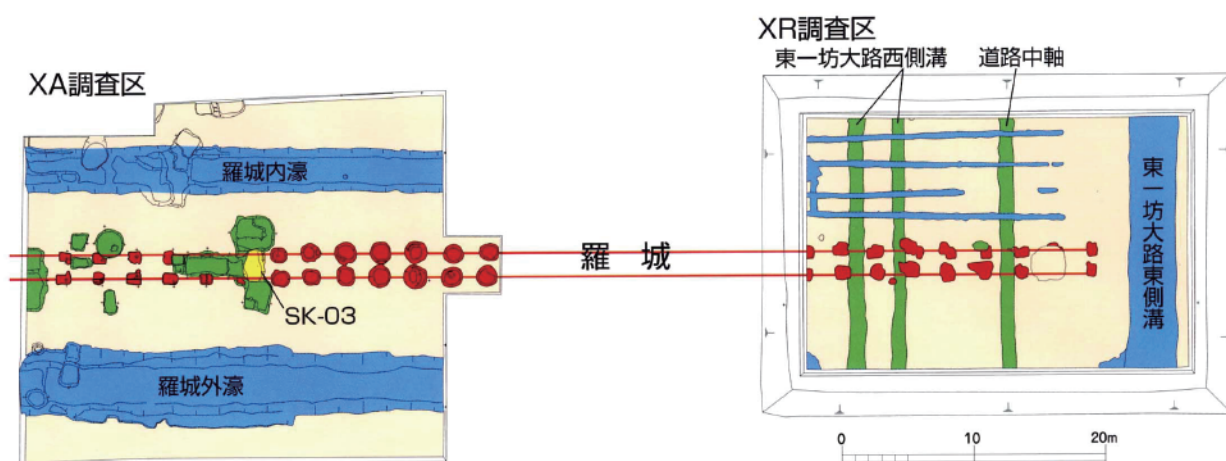


図2 2005年調査羅城遺構（現地説明会資料より一部改変。縮尺任意）



図3 2005年調査羅城遺構
（西から）

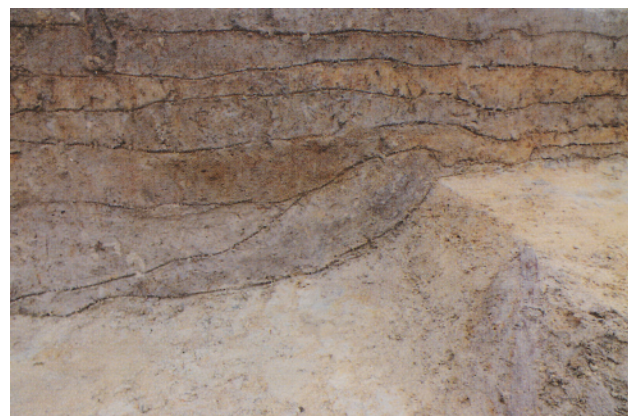
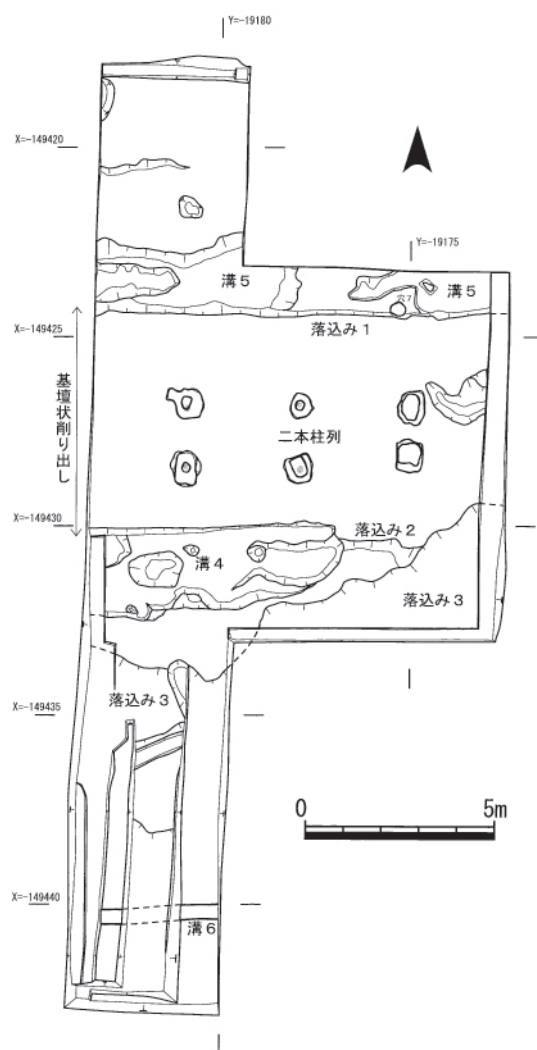
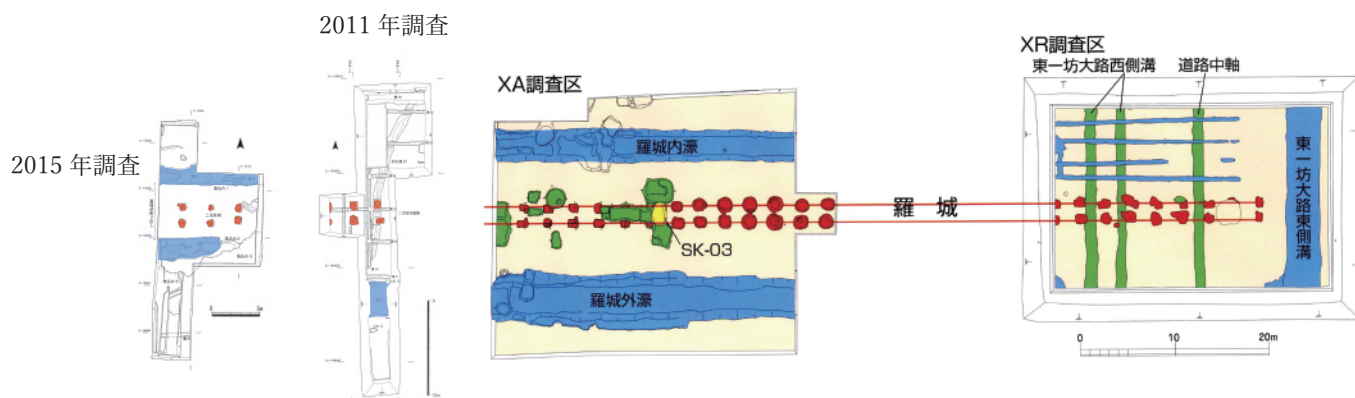


図6 2015年調査羅城遺構
(大和郡山市教委 2015 文化財調査概要 41 より)



平安京の造営計画と京南辺の造営過程

近畿大学 網 伸也

1 平安京の造営計画

桓武天皇によって延暦 13 年（794）に遷都された平安京は、『延喜式』左右京職式の京程条からも想定できるように、京内の大路・小路の幅や道路側溝の位置、町の大きさが数値的に細かく規定された非常に計画性の高い都城であった。『延喜式』によれば、南北は一条から九条に北辺を加えた 1753 丈（約 5.2km）、東西は朱雀大路を挟んで一坊から四坊まで配置する 1508 丈（約 4.5km）の長方形の条坊を備えており、一町の幅はすべて 40 丈（約 120m）で統一することに成功した。平城京では、造営計画線を宮城域も含めて 1800 小尺（1500 大尺）に設定し、そこから道路幅を均等に割り振ったため、大路に面する町の大きさが小さくなるという構造的矛盾を抱えていたが、平安京はこのような構造的矛盾を精緻な造営計画によって解消したのである。

平安京が一町の大きさを 40 丈四方に統一できたのは、条坊設計においてこれまでにない新たな分割原理を採用したからである。具体的には、宮城を造営する予定の広い段丘面に宮城計画線をあらかじめ南北 470 丈、東西 400 丈の長方形で設定し、南北を 10 等分した 47 丈幅の東西線と、東西を八等分した 50 丈幅の南北線を条坊分割の基準とする。そして、これらの計画線から規則的に路幅を割り振ることで、宮城東西面および南面街区のすべての町の大きさを 40 丈四方にできたのである。宮城大垣の南北幅が 460 丈、東西幅が 384 丈となっているのは、このような造営計画の結果だったといえる。そして、平安京全体も当初から一定の規格性のもとに造営計画線を設定し、条坊路の割り付けを行うことで『延喜式』左右京職式京程条に記されるような整然とした都城を実現化したのである。

2 京南辺域の造営過程

遷都翌月の 11 月 21 日に遷都を祝賀して、造宮使が平安京の構造を具体的に記した造京式を奏上しており、この造京式の内容をもとに『延喜式』左右京職式京程条が成立したと考えられている。実際に発掘調査で明らかとなった平安京の姿は『延喜式』とほぼ合致しており、その原典となった造京式が遷都から一箇月後には奏上されていることを勘案すると、平安京では宮城と一体となった全体計画が早い段階でできており、京極の明確な設定も当初から意識されていたことを示している。

とくに、南京極については羅城門の造営がいつ行われたのかが問題となるが、鍋取川の掘削によって羅城門の遺構はほとんど壊されているようで、発掘調査では明らかにできない。ただ、『日本紀略』によると弘仁 7 年（816）初月の大風によって倒壊しており、『寛平御遺戒』には桓武天皇が羅城門の造営現場を視察した時の逸話が記されていることから、延暦年間には造営が始まっていた、つまり遷都直後の京造営においてすでに南京極が固められていたことを示唆する。

南京極が平安京遷都段階から意識されていたことは、東西二寺の造営からも推測できる。平安京の官寺として造営された東西二寺は、九条大路に面して左右京対称に占地しており、羅城門とともに平安京の正面を飾る象徴的な寺院としての性格を持っていた。平城京の薬師寺が右京六条二坊、大安寺が左京六条四坊と非対称であり、京城の中央部に造営されているのと大きく様相が異なっている。京城における寺院造営を東西二寺しか認めなかった平安京においては、これらの官寺の位置が平安京全体の造営計画のなかで南京極に当初から決められ、羅城門とともに新京の正面を飾る装置として期待されたのである。

ちなみに、東寺と西寺の造営過程をみると、延暦16年の段階で『日本後紀』に「造東大寺長官」がみえ、『類聚国史』には「造西寺次官」の存在が確認できる。また、『類聚国史』に載せられた延暦19年四月の勅には、王臣豪民による山林占有・伐採を禁じるなか、東西二寺には堂を構えるために巨木の伐採を許している。これらの事実から、延暦年間に東西二寺の造営が進められていたことは間違いのないであろう。しかし、桓武天皇は東西二寺の竣工をみることなく崩御し、東西二寺が官寺として機能し始めるのは嵯峨天皇の時代になってからである。

3 羅城の構造を東寺の築地から考える

東寺の伽藍地を巡る諸門と築地については、伽藍地の北側を区切る中仕切築地が九条坊門小路より北側にあるため、創建当初から伽藍地が現状の敷地を占有していたか課題であった。しかし、解体修理に伴う調査で北大門が創建当初まで遡る上土門であることが判明し、九条坊門小路に開く慶賀門は穴門構造と推定された。また、東大門の解体修理に伴う調査でも、平安時代前期に遡る基壇版築を検出し、東大門も創建時に遡ることが明らかとなった。

築地本体の調査は、東築地の修理に伴う調査を実施し、平安時代から江戸時代までの築地版築を同じ位置で検出した。『延喜式』京程条の大宮大路西築地心推定ラインにはほぼ合致し、同位置で創建当初から現代まで築地が継承されている。また、東大門より南では築地版築の下層で、遷都直後の土器を包含する北東から南西に流れる川（旧大宮川か）を検出した。東築地の造営にあたり大宮川を制御する必要があったことを示唆するとともに、東寺の完成が桓武朝より遅れることを考古学的に証明できた重要な成果といえる。

創建当初の築地には寄柱の礎石が残されており、礎石間の距離から築地の基底部幅は『延喜式』の規定よりも広い7尺（2.1m）であった。寄柱礎石は築地基底部に据えられていたと考えられ、今回の羅城の構造を考えるうえで参考になる。また、東築地調査では瓦がほとんど出土せず、長保2年（1000）『造東寺年終帳』の東築垣火災の記載から少なくとも10世紀末には上土塀であった。西寺西築地の内溝から10世紀に下らない瓦が多数出土したことから、創建当初の築地は東西二寺とも瓦葺きだった可能性が高いが、羅城が大宮（西大宮）大路までだと京外から伽藍地側面と羅城端部が見えてしまい、新京を飾るモニュメントとしての見栄えが問題となろう。平安京の羅城が西大宮大路を越えて西に延びていた理由の一つとして、東西二寺の京外からの景観を意識したことがあげられるのではないだろうか。

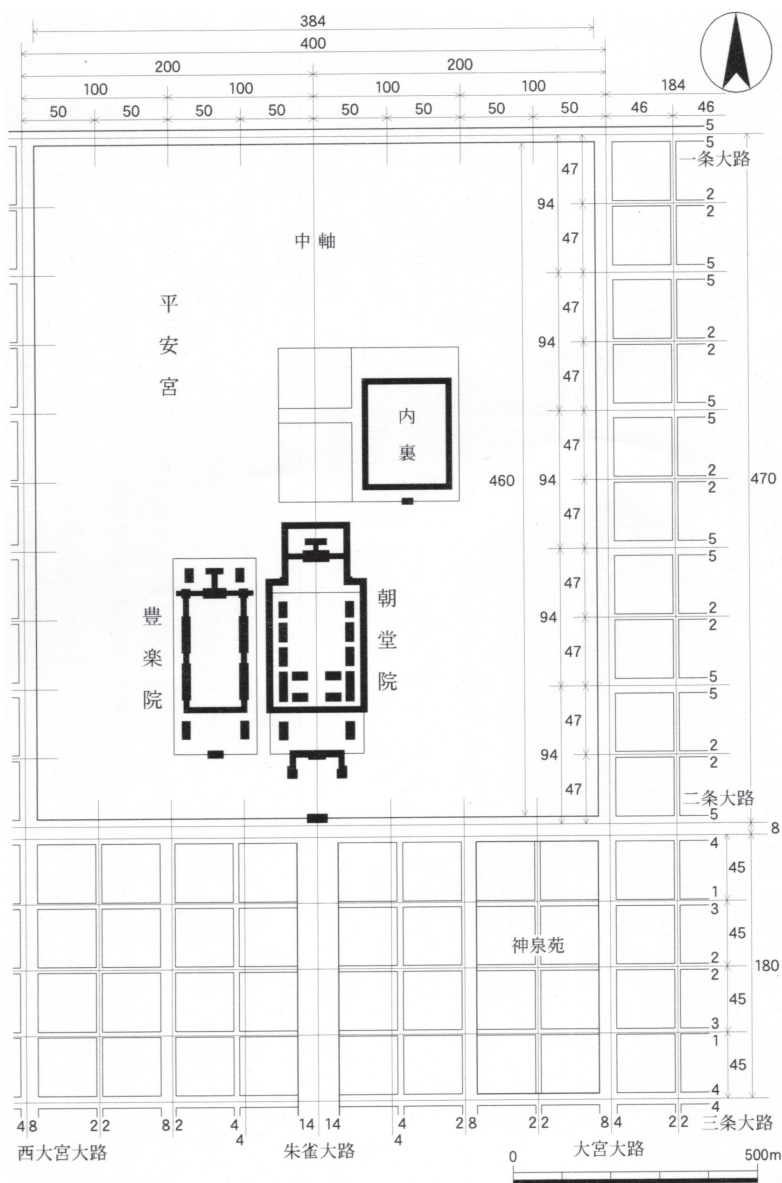


図1 平安京の造営計画線
(網伸也『平安京造営と古代律令国家』
塙書房 2011年)

図2 平安京南辺部復元図
(網伸也「平安京」講座畿内の古代学Ⅲ
王宮と王都雄山閣 2020年)

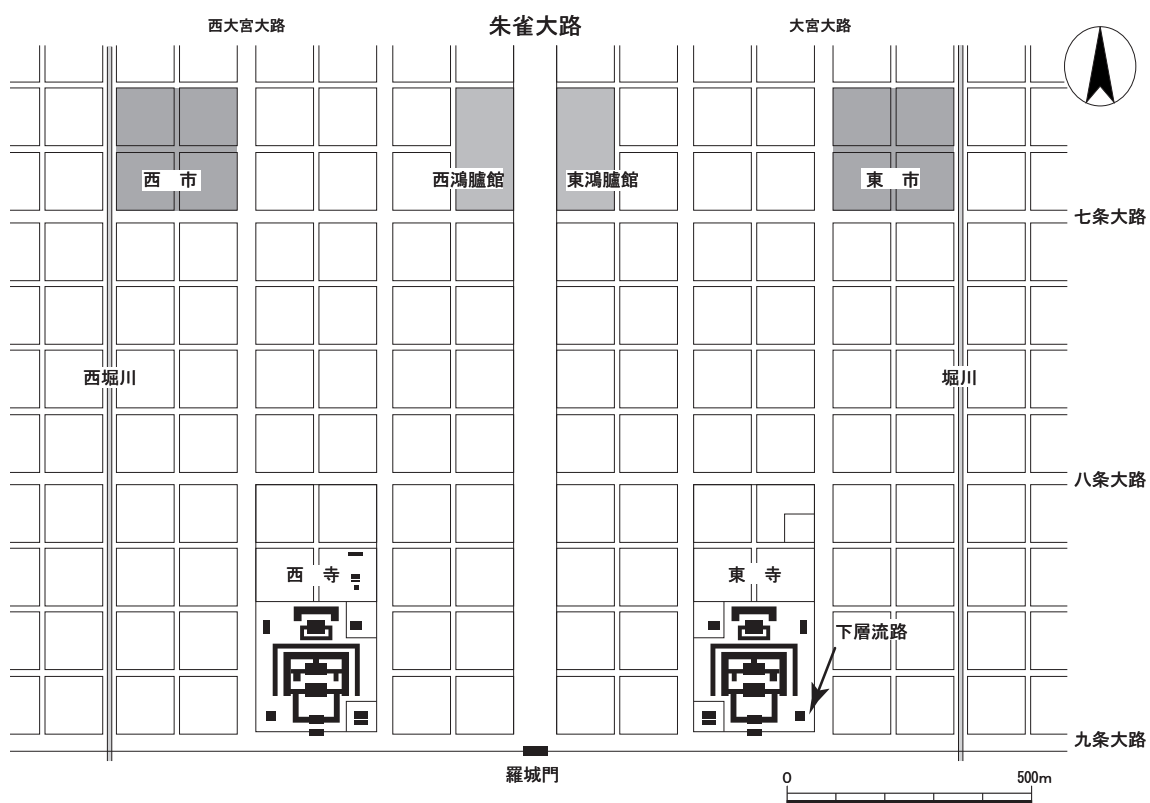


図2 平安京南辺部復元図



図3 現在の平安京南正面俯瞰（南から）



図4 東寺東築地断ち割り状況

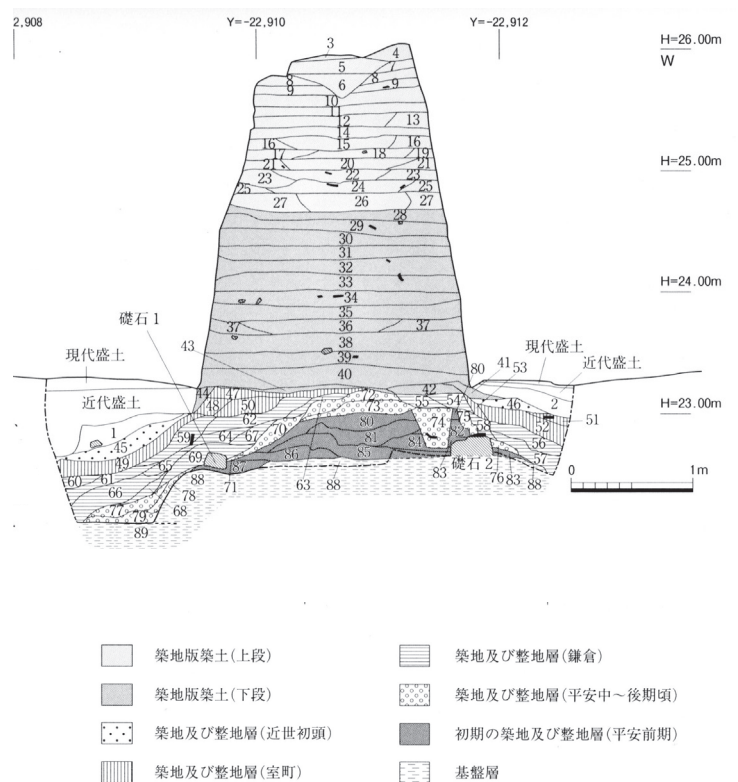


図5 東寺東築地 10 トレンチ断面図

(教王護国寺『史跡教王護国寺境内保存整備事業報告書』2015年)

